

2 日目、午前中「実証研究」の分科会 3 に参加。この分科会には、唯一、大学のスポーツ研究者の発表「スポーツ文化の継承と消費動向一家計における消費支出の分析から一」があった。

パソコンを使ったプレゼンテーションで、Power Point の威力(前日にも使用者あり)に感服。

座長の永山 貞則氏(日本統計協会)が分析に使用した資料について指摘した点は、詳細に報告できないが的をえていた。現象の解析に利用する統計資料について、その資料の限界を充分精査しなければならないと改めて自戒することになる。

午後、シンポジウム「文化の継承と創造」が企画されていたが、前日の雨がやみ、しかも週末、急遽、私の専門スポーツ領域であるアウトドアスポーツのメッカ・琵琶湖

周辺のスポーツウォッチングに出かけることを決め、サボタージュ。

学会会場は、琵琶湖畔で、白亜の建物・びわ湖ホールに隣接したピアザ淡海(写真が載せられなくて残念)、周辺の景観とあいまって、文化の薫りが漂う場であった。また、シンポジウム終了後に、びわ湖ホールでの声楽アンサンブル定期公演をドッキングする企画演出は、この学会に相応しいものであったが、私の文化享受能力の貧困さゆえに足が向かわなかった。

佐々木さん以外、参加者の誰とも面識がなく、新鮮にして、気楽な一方、適度な緊張感が、心地よい学会でもあった。今後、私のポテンシャルの余力をどの程度この学会に投入できるか、正直、不安でもあり、楽しみでもある。

(金沢大学経済学部教授)



S O H O 体験記～3つの困難～

赤 澤 徹 也

筆者は1998年4月から金沢大学大学院経済学研究科において社会人院生として財政学を専攻、2000年3月に課程を修了した。現在、生涯教育の一環として、社会人の再教育というものが大学に求められる時代。社会人入試制度は拡大される傾向にあり、筆者の周りにも働きながら大学に通う人間は多い。

しかし、筆者の場合は一般の社会人学生と違う点があった。それは在宅勤務という形態で仕事をしていた点である。通常、社会人教育は勤務時間外に、あるいは特別に認めてもらい勤務時間に講義を受けるのが一般的であると思うが、筆者が勤務する会社は金沢に事務所はなかったのである。当初は休職して学業に専念という話もあった

が、仕事の内容が医療・福祉に携わる方への出版物やセミナーの企画・営業であり、企画書作成や取材原稿の作成などそもそもは“場”を問わない仕事である。また、医療法人が筆者の研究課題でもあったため仕事を続けることにし、8畳一間のアパートを事務所代わりに（いわゆるSOHOで）働いた。

現在では、情報通信技術の発展のおかげで、距離や空間の制約が縮小されてきている。こうした状況なので在宅勤務も一部では可能となり、筆者も恩恵にあずかった。しかしそこには多くの困難、デメリットもあった。現在は再び事務所勤務に戻っているので、当時の在宅勤務を2年間の反省をかねて比較し振り返ってみたい。

まず、会社や事務所は言うまでもなく仕事をする“場”である。しかし、在宅勤務では家が仕事をする“場”でもあるが、そこは寝る“場”であり、食事の“場”でもあり、息を抜く“場”でもある。その“場”は主体（筆者）の意志によって変化するものであり、体の調子や仕事の緊急度の問題などで意志が左右される場合、上司の目もないのでその空間が仕事の“場”以外の性格に安易に流されてしまう。そのため効率が悪くなることが多々あった。しかし事務所という“場”は個人の意志によって変わるものではなく、あくまで普遍的に仕事をする“場”である。当時、大学の長期休暇などには事務所に顔し、溜まった業務を事務所で行なうと効率・能率が全然違った。

むろん、事務所でも息抜きはするが、皆が働いている“場”では長々とできない。また堂々と寝たり遊んだりすれば、追い出されるのは必至である。ここから働く“場”というのは非常に大事だと改めて認識した。

2つめには、在宅では一緒に働く人の成功や失敗から学ぶことができない点があげられる。従来の内職的な仕事であれば、単純な作業であり、ノルマに対する出来高払いの報酬なので、成功や失敗体験の重要性はなく単純作業のものが多し。しかし筆者の企画という仕事は情報を集め、解釈し加工し、それを商品化して販売することであったので、ちょっとした工夫で大きな成果があげられることも多い。こうしたことは見よう見まねの職人的な世界であり、いちいち質問して教えてもらうことではなく、人数が多ければ多いほどその数だけお手本は存在する。また同僚のちょっとした失敗は、自分も同じような過ちを犯しやすいものであるから、「人の振りみて我が振り直せ」で、その過ちに早い段階で気がつき、修正が効くのと効かないのとでは、得られる成果や、失敗したときの後始末が大きくかわる。この失敗例もまた無数にある。一人ではこうした成功や失敗をなかなか知ることができないことを知った。

最後に分業がなく、一人ですべてやらなければいけない効率の悪さがあげられる。郵便物を出したり、経理上の精算をしたりなど、数人分まとめて分担してできれば、効率が良いものを、すべて一人でやらなけ

ればいけなかった。仕事が忙しくなると、こうした仕事は多くなるのは必然であり「ついでにお願い」ができないのは結構辛い場合があった。当たり前といえば当たり前なのだが、体験してみても分業の有難さを実感、アダム・スミスの偉大さを再確認した。

むろんメリットも少なからずあり、恩恵を受けたのも事実である。通勤に関わるコストや時間および労力の削減は筆者のみならず会社にもメリットがあったといえる。さらに高齢化社会をむかえ、親の介護など

のためにフルタイム勤務が困難な有能な人材を有効活用する方法でもあり、今後ますます広がっていくであろう。しかし、筆者は入学前に作成した事業計画ほど成果を上げることが出来なかった。その事実をどの様に据えるか。また、筆者は周りに迷惑を掛けながら仕事を進めていくタイプであり、一人でコツコツと進める仕事には不向きであることを再確認した。結局のところ、個人の向き不向きの資質の問題なのであろうか。

(財団法人 日本総合研究所)

「起業ネットかなざわ」のNPO法人化に際して

山内 司

学生と若者層を対象とした起業支援を目的とするNPO、起業ネットかなざわが、さる平成12年5月にNPO法人(特定非営利活動法人)として石川県で13番目の認証を受けた。

起業ネットかなざわは、私をはじめ、金沢大学や他大学の大学院生、学部生、そして社会人を中心に運営しているNPOである。

そこで ①法人化について②‘起業’について③起業ネットかなざわの今後について この3つを中心にまとめていこうと思う。

①法人化について

従来の営利を目的としない任意団体、例

えば既存のボランティア団体などが法人化するにあたってのメリットは数多い。例えば、法人として賃貸契約などを結べる、法人名で銀行口座が持てる、などである。

しかし起業ネットかなざわは、そういった実務的なメリットよりも、運営者の自覚の喚起、対外的な信用力、といった面のメリットに注目した。そして、法人化が活動基盤を広げる起爆剤になることを期待して、法人申請に踏み切った。法人の名に恥じぬよう、今後も精力的に活動していきたい。

②‘起業’について

起業ネットかなざわは、起業を目指す人を支援する組織である。しかし起業ネットかなざわ自体も、ある意味では‘起業’の